
恐怖の黒い水

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖の黒い水

【Nコード】

N7349V

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

みなさんも学生時代に一度はその学校に関する怪談話を耳にしたことがあるだろう。だけどその大半は根も葉もない作り話で、妙に恐怖感ばかり煽るようなものばかり。そして誰かがいざ真相を解明してみると、大抵はいたずら好きの子が流した単なる噂か、あるいはくだらない仕掛けによる恐怖演出。おそらく、もう散々聞き飽きているのかもしれない。

だけど今回の話は断じてそんな作り話ではない。これはこの高校で本当にあった出来事からできた呪い話。始まりはある女子高生が授

業と授業の間の10分休憩、トイレで目撃したことだった。夏といえぱやっぱりホラー、初挑戦だけど、私がみなさんを涼しくする身の毛もよだつような恐怖をお届けします。それでは、どうぞよろしくお願いします。

1、始まりは噂から（前書き）

白井香奈 16歳

この物語の主人公で県立水原高校の2年生。休憩時間にトイレで恐ろしい光景を目撃する。そのことを彼、青山知輝君に相談し二人はその真相を説明していくことになる。

青山知輝 17歳

主人公の同級生で同じ2年3組の男子。彼女の香奈とは4カ月前のバレンタインデーに本命チョコをもらって、そのときから付き合っている。彼女からトイレで目撃した恐怖体験を聞き、一緒に真相を説明していく。

1、始まりは噂から

思えば始まりはくだらない噂話からだった。そのときは少し気に留めていただけだったけど、まさか本当にその通りのことが起こるとは……。

〳1年前の夏〵

初夏の日差しが眩しいある日、昼休みに弁当を食べ終わった僕は教室で自分の席に座っている。休みが始まって10分近く、窓から外を見るとそろそろ昼ご飯を食べ終わってくるころなのか、ちらほら運動場に人が出て来始める。

（さてと、そろそろ僕も行こうかな）

そう思つて席を立ち上がろうとしたとき、教室の前の入り口から声が聞こえてくる。

「おーい！　ともきー！」

そつちを見ると呼んでいるのは友達の赤田数貴だ。彼とは入学当初から友達で、普段からよく一緒に話したり遊んだりしている。

「おうっ！」

手を挙げて呼び掛けに答え、席を離れて彼のほうに駆け寄る。

「外に遊びに行こうぜ！」

「行くか」

二人は廊下を歩いて階段を下り、1階の靴箱に並んで歩いていく。

「あつ、お前さ、黒い水の噂、聞いたか？」

「黒い水？　なんだそれ？」

「あー、じゃあ、まだ聞いてないのか。今ちよつとした話題になつてんだよ、聞くか？」

「聞くよ」

黒い水、それを聞いただけでは始めどんな話が全く分からなかった。ただなぜかそのとき、妙な感覚が背中を走り、少し寒気がした。

今思えばそれは無意識に予感したのかもしれない、何か恐ろしいことがいつか起こると。

2、トイレの黒い水

「この前、彼女から聞いたんだけど。この学校のある女子トイレの水が真つ黒に染まることがまれにあるらしいんだ」

彼は高校に入学してからまだ2ヵ月ちょっとしか経っていないのに、なんと同じクラスの女子と付き合っている。噂はその彼女から聞いたようだ。

「はあつ、黒に？ 赤じゃなくてか？」

僕は始めにこの話にこういう疑問を持った。女子トイレという場所から直感的に怪談話だと気付いた僕は、それが普通なら血の色を連想させる赤ではなかったから。

「ああ、それは俺も不思議に思っただ。でもどうも黒らしいんだ」

「へえー、そうなのか」

「うん。なんでもさ、昔この学校の女子トイレで髪を黒に染めていた女子生徒の呪いなんだとよ」

「なるほど、だから黒か。ん？ でもなんで髪なんか染めるんだ？

第一校則で禁止されないか？ 毛染めは？」

「そうなんだよな。それにここ最近は何も見ていないらしいし」

「じゃあ、単なる誰かの作り話じゃないか？」

「そうでもないらしい。どうも彼女が言うには、その黒い水を見たものは呪われるらしいんだ」

「呪われる？」

「そうだ。そして黒い水を見た次の日から酷いいじめを受けて、最後には耐え切れず自殺することになるんだとよ」

「まじか。でもそれも作り話じゃ……」

「違うらしいぜ。何しろ本当にあったらしいからな、10年前に。黒い水を見たある女子学生が酷いいじめを受けて、その後北校舎の屋上から飛び降りて自殺した話が」

「おっ！ おいつ！ ちょっと待て！ それってまさか……」

「そうだ、あの血痕だよ」

僕はその話を聞いたとき本当に驚いた。実はこの学校には誰も近づこうとしない場所があつて、そこが北校舎北側の真ん中の下のコンクリートのひび割れ。その隙間には未だに流れ落ちずに赤黒い血痕が残っていた。

3、恐怖の序章

「そうか、それで。やっぱり単なる血痕じゃなかったんだな」

「だな」

「ん？ でも待てよ、ってことはその自殺って10年も前の話ってことだよな」

「そうだな」

「じゃあ、なんで流れてないんだ？ 血痕？」

「そこだよ。だから呪いだって言われてんだよ」

「そういうことか。なんか嫌な話だな」

「ああ」

ここで二人は1階の靴箱にたどり着き、靴に履き替えた。

「それで、話は終わりか？」

「まあ、あまり気にすんなよ。噂は噂なんだからよ」

「そうだな。そうするよ」

そのまま二人は外に出ると、運動場へ走って行った。

く現在へく

今思うとそのときは話を聞いただけで、少しだけ気に留めてはいたけど、そんな重要なことだとは思っていなかった。だけど現実には違った。6月2日の木曜日の今日、去年あの噂話を聞いてからほぼ1年後、目の前にいる彼女が口にしたのだ。

「ねえ、聞いて、ともくん、聞いて。私、見ちゃったんだよ！ 黒い水を！ 助けて！ お願い！ 私を助けて！！」

僕は思わず耳を疑った。本当にそんなことが起こるとは全く想像してなかったから。しかしその彼女の言葉は、恐怖に満ちた話のほんの序章にすぎなかった。

4、目撃したこと

「おいつ！ それホントか？ かな！」

「ホントだよ、ホント」

彼女の目を見開いてあまりにも真剣な表情、どうやら嘘ではないようだ。

「分かった。聞いてやるから落ち着いて話してみろよ」

「うん」

すると彼女は1回大きく深呼吸して落ち着きを取り戻し、目撃したことを話し始めた。

（回想シーン）

6月2日の木曜日の昼、4時間目が終わって教室で友達と一緒に弁当を食べ終わった私は、一人で教室を出て4階の廊下の東側、階段の手前にある女子トイレに入って行く。去年のこの時期に噂になった黒い水の恐怖、ちよつと覚えてはいたけどこのトイレで起こったかまでは知らなかったし、怖いからといってトイレを我慢するわけにもいかないし、あえて気にしないようにした。

しかしいつもように個室に入り、おしっこを済ませて便座から立ち上がり水を流した。始めは普通に汚れない透明な水だった。ただど流れてから2秒ほどしてみるうちに水は黒く染まり、流れていき便器には黒い水が溜まった。

「うっ、うそ」

少し小さな声でそれだけ呟いたけど、それ以上は恐怖で全く言葉にならなかった。それから私は逃げ去るように急いで洗面所に向かい蛇口をひねると……、そこから出たのもまた黒い水だった。

5、彼の反応

それを見た私は急いで蛇口をひねって水を止めて、結局手も洗わずにトイレを出てしまった。

「どう思う？　ともくん」

「なあ、その前に一つ確認してもいいか？」

「何？」

「かな、手、洗ってないだろ」

「……うっ、うん」

図星だ、彼の言うとおり私はトイレを出た後も蛇口をひねるのが怖くてまだ手を洗っていない。

「汚いな、ちよつと来い」

「えっ」

そう言うとは彼に左手をつかまれて少し強引に水道がある廊下の真ん中に連れて行かれる。そして右手で蛇口をひねり水を出してくれた。

「ほら、洗いな」

「うん、ありがとう」

私は恐る恐る両手を流れ出る水道水に差し出し、30秒ほど手を流し洗い、ハンカチを出して手を拭く。

「さっきの話だけど、かな、本当に見たのか？　黒い水を？」

「ホントだよ、うそじゃないよ！」

「そうか。ちゃんと明るかったか？　トイレ？」

「うん。だって電気ついてたし、今日、外晴れてて、こんなに明るいし」

「なら、見たのは間違いなさそうだな」

どうやら彼は事実として受け止めてくれたようで、私は少しほっとして安心した。

6、確認

「じゃあ、信じてくれるんだよね、ともくん」

「ああ、見たことはな」

「えっ」

「見たことは事実だろ、ただそれが本当に黒い水だったかどうかはな……」

どうやら彼は私が見たことは事実として認めてくれたようだが、黒い水そのものを信じてくれたわけではないようだ。

「やっぱり、信じてくれないの？」

「いや、そういう意味じゃない。いくつか確認したいことがあるんだ、黒い水が何だったのか。いいか？」

「うん」

「そうだな、まずは……、真っ黒だったか？」

「うん、真っ黒。墨みたいに」

「そうか。なら、サビとかではなさそうだな。髪の毛とかは落ちてた？」

「うんうん、落ちてなかったよ」

「かなの前に誰が入ってたか？」

「いや」

「なるほど。となると水道管や、誰かのイタズラではなさそうだな。まあ、でも一度タンクの中は確認しないと」

「そっか。でも水道の水も黒かったんだよ」

「それは錯覚の可能性もある」

「えっ、どうして？」

「残像ってことがあるだろ。恐怖感からそう見間違えたっていう」

「そんなはずないよ。だって私！ 見たもん！」

「落ち着けよ、かな。まあ、どちらにせよ、タンクの中は確認しないと」

「……えっ、もう1回入るの？ トイレ」

「当たり前だろ。だけど今日の放課後だな、昼間は僕が入るわけにはいかないから」

「いやだよ、私」

「そういうわけにはいかないだろ。かなが見たんだから。まあ、かなが来ないならずっと怖いままだけだな」

「そんなぁ……」

「どうする？」

「……分かった！ 行くよ、行けばいんですよ！」

「なら決まりだな。時間は今日の放課後8時半、いいな」

「うん」

仕方がないので泣く泣く私は彼の要求に応じることになってしまった。

7、意見

昼休みに彼女から黒い水を目撃した話を聞いた、しかし彼女が僕以外にも黒い水の話をしているかどうかは分からないが、誰か他の人にも話してみても意見を聞く必要がある。

彼女は女子テニス部、僕はサッカー部に所属しているのだが、さっそく放課後の練習の休憩時間、友達の赤田君に話してみた。

「かずきー、おつかれさま」

「おつかれー、やっぱ、夏の練習は暑いしきついな」

「うん。あのさ、ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど……」

「いいけど、なんだ？」

「彼女が見たらしいんだよ、例の黒い水を」

「おい！ それ、マジか！」

「うん。まあ、まだ確認してないから本当かどうかは分からないけど」

「見間違えてこともあるもんな」

「そうそう。でも心配だな、彼女いじめ受けないといいけど……」

「それはお前次第だろ」

「えっ」

「だって恋人だろ。彼女のことはなんとしてでも守ってやらないと」

「そうだな。僕が守るしかないもんな」

「頑張れよ」

「うん、ありがとう」

「あつ、そうだ！ 協力するよ、俺らも」

「いいのか！？」

信じがたいホラー話とはいえ僕も少なからず怖い気持ちはある。そのため彼の協力は僕にとって非常に心強かった。

8、親友

私は今日、怖い気持ちを我慢してずっと学校にいるけど、正直不安でならない。本当なら彼以外にも目撃したことを相談したかったのだが、誰かにするとそれをきっかけにみんなに知られていじめを受けるのではないかという恐怖にかられていた。

しかしこのままでは流石に精神的に辛かったので、彼と同じくらい信頼できる親友で同じ女子テニス部の黄田愛里ちゃんに相談してみることにした。

「ねえ、えりちゃん」

さっそく私は放課後の部活動の練習、途中の10分休みに彼女に話しかける。

「何？　かなちゃん」

「ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど、いいかな？」

「いいよ」

「ありがとう。でも、ここじゃ……」

「場所変えよつか？」

「うん」

私が少し話にくそうにした、それだけで察してくれたのか彼女は私の左手を握って、みんながいるテニスコート周辺から、校舎内の1階の廊下誰もいない静かなところに連れていってくれた。

「私、分かるよ。かなちゃん、何か怖い思いしたんでしょ？　手握ってあげるから、話してみて」

「ありがとう、ホントに」

こういうときの親友の配慮は本当に心強いもので、私は一呼吸置いて気持ちを落ち着かせて話を始めた。

9、4人の仲

「実はね、私見ちゃったんだ、黒い水を」

「黒い水って……、あのトイレの？」

「うん」

「ねえ、それってどこのトイレで？」

「南校舎4階の東側のトイレだよ」

「そっか。そこだったんだ」

「知ってるよね、えりちゃんも黒い水の呪い」

「知ってるよ。いじめられて最後には自殺に追い込まれるっていう」

「私、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。それにとくんがいるじゃない、かなには」

「そうだけど……」

「それも私たちもいるしね」

ここで彼女が私たちと言ったのは自分が付き合っている彼の赤田君も入れていることで、私と彼の青山君を合わせて4人はとても仲がよかった。

「ありがとう。でもさ、私今日また行くことになっちゃったの、そのトイレ」

「どうして？」

”ピピピッ、ピピピッ”

そのとき彼女の問い掛けを遮って高い携帯の着信音が鳴り響いた。

「あつ、ちょっと待って」

「うん」

「彼からだ」

珍しく部活動中に来たメール、それは彼女の彼からだった。

10、4人一緒なら

彼女は携帯を開いてついさっき来たメールを読んでいる。

「何だつて？」

「うん。同じだったみたい」

「どういうこと？」

「かずくんもちょうどともきくんから相談受けてたみたいで、放課後一緒に調べに行かないかってさ」

「そうだったんだ」

「よかったね、かなちゃん。4人一緒なら怖くないでしょ」

「うん。ありがとう」

私は親友の優しさを実感し、不安だったけど大分気持ち became 楽になった気がした。

赤田君はポケットに隠し持っていた携帯を出して、彼女にメールを送っている。

「彼女、大丈夫なのか？ ホラーって」

「大丈夫だよ。えりとこの前一緒にホラー映画見に行ったから」

「そうなんだ」

「しかもさ、それ彼女の誘いでさ、かなり怖い奴だったよ。それに彼女平気な顔して見てたし」

「それはすごいな」

「だろ！」

“ピピピッ、ピピピッ”

すぐに彼の携帯の着信音が鳴り、返信が返ってきた。

「そうか。なんか同じだったみたいだぜ。えりもかなから相談受けてたところだったよ」

「そっか」

「じゃあ、決まりだな。部活終わったら4人で行こうぜ」

「そうだな」

このあと彼が彼女に集合場所、時間などの確認のメールを送り、
4
人一緒に調べに行くことが決まった。

11、待っているとき

6月の中旬の1年で最も日が長い初夏の時期、部活動の練習が終わるのは遅く、今日もすでに8時をかなり回っている。私たち二人は練習着姿から制服に着替えて、待ち合わせ場所の南校舎4階の階段の廊下に来ていた。日没後、放課後の校舎は当然明かりなどあるはずもなく、ほぼ真つ暗で静まり返っている。その中を私たちは携帯の明かりで足元を照らし、恐る恐る階段を4階まで上がってきた。時間は8時20分過ぎで待ち合わせ時間の8時半になっておらず、彼二人はまだ姿を見かけない。

これから4人で一緒にあの恐ろしいトイレを調べるのだが、すでに正直今でも夜の学校というだけで非常に怖く、できることなら自分だけ家に帰ってしまいたい気分である。さらにまだ練習をしている部活があるのだろうか、たまに聞こえてくる声が風で木が鳴る音に混じって余計に恐怖感演出していた。

「ねえ、えりちゃん」

「何？」

「怖くない？」

「ちよつとね。でも私、結構ホラー好きだから」

「そうなんだ」

「うん。だからね、今ちよつとワクワクしてるんだ」

初めて知ったことだがどうやら彼女はホラーが好きなようだ、怖い話が専らダメな私とは正反対である。

私たちが来てから3分ほど経っただろうか、私の両肩に突然2つの手が乗っかってきた。

12、怖がりな私

「きゃー!!」

私は驚きのあまり両手を振り上げて、大声を上げて叫んだ。

「ばかつ！ 何すんだよ！」

「えっ」

私は恐怖のあまり目を瞑っていたせいか、一瞬何が起きたのか全く分からず、どこからか分からず聞こえた声だけが返って恐怖感を掻き立てる。

「わあー！ きゃあー!!」

「だから叫ぶなって言っただろ！」

今度はそう言われて無理矢理口を押えられ、すると抵抗できなくなつた私は静かになる。

「目を開けてごらん、かな」

右横からえりちゃんの声が聞こえてくる。私は勇気を出して恐る恐る目を開けてみた。すると目の前には暗いけど、はっきりと赤田君の姿があつた。

「はあっ」

私の口を押えられていた手は離され、ため息が一つ漏れると落ち着きを取り戻し、そして後ろにいたのがともくんだと認識できた。

「もうっ、驚かさないでよ」

「ごめん、ごめん。しかしお前、ホントに怖がりだな」

「仕方ないでしょ。それに見ちゃったんだから」

「それもそうか」

「おいつ、余計な話してないでさっさと調べようぜ」

「そうだな」

「うん」

赤田君の声掛けにみんな同意し、4人は例のトイレに向かって廊下を歩き始めた。

13、開いていた訳

4人で夜の学校の暗い廊下を歩きトイレに向かう間、私は気になつていたことを彼に聞いてみた。

「ねえ、ともくん」

「何？」

「どうして今日南校舎の入り口、鍵しまつてなかったの？」

皆さんは彼女が持ったこの疑問、少し不思議に思つかもしれない。普通高校といえは部活動や先生の残業などの関係で夜遅くまで鍵が開いていて、電気がついていることが多い。しかしこの高校は珍しくどんなに夜遅くまで練習している部活があつても、一年中夜8時に全ての出入り口の鍵を閉めてしまう。つまりよっぽどのことがない限り、夜に学校に侵入することはできないということだ。ところが今日は私たちが南校舎の入り口に来たときにはもう8時20分前だったというのに鍵は開いていて簡単に中に入ることができたのだ。

「あー、僕ら開けといたんだよ」

「えっ、どうやって？」

「まさか窓割つたんじゃないんでしょうね」

「しねーよ、そんなこと。予め開けておいたんだよ、1階の窓の鍵を1つ」

「そういうことか。やるね」

「まあな」

「あれ？でも警備の人が閉めちゃうんじゃないの？」

「大丈夫。それは早くても9時以降だから。それまでは閉められないってわけ」

「そっか」

ここで4人は例の女子トイレの前に到着した。

「さてと、さっそく調べるか」

「えっ、ちょっと……」

「ぐずぐずしてる暇はないんだ。早くしないと警備の人が来ちゃうからな」

「大丈夫だよ、かな。4人一緒だから」

「……分かった」

仕方なく納得した私。いよいよ4人は女子トイレの中に足を踏み入れた。

14、開かれるドア

4人がトイレに足を踏み入れる。彼がまず電気を付ける。するとさつきまでは暗くて恐怖感を掻き立てられるだけだった空間が照らされて明るくなる。だけど昼間目撃したことを思うと、踏み出す一歩一歩が私にとって非常に重い。だけどすぐに赤田君の声が私たちの歩みを遮った。

「ちよつと待った!」

「何?」

彼女のえりちゃんがすぐに反応する。

「誰か見張りをしたほうがいいんじゃないか?」

「あつ、そっか」

「それもそうだな」

確かに彼の言うとおりである。いくら警備の人が巡回に来るのは9時以降とはいえ、それまで誰も来ないという保証はどこにもない。

「じゃあ、俺がやるよ。廊下で見張っておくから、3人で調べて」

「ありがとう」

「分かった」

赤田君は一人廊下に出て見張りをして、私たち3人で調べることになった。

「どこのトイレだ、かな」

彼にそう聞かれて私は4つある個室のうちの入り口から2番目を指さした。

「ここか、よし」

そう言つて彼は私が指したトイレのドアを開ける。ちなみにこの学校の女子トイレは入り口に近い2つがみんな洋式で、ドアは全部外開きになっている。

ドアが開けられて中が見えたとき、私は恐怖のあまり視線を逸らし直視できなかった。

15、トイレの中

恐怖のあまり怯える私をよそに彼とえりちゃんはたんと中を調べ始める。

「特に不審な点はなさそうね」

「だな」

「ねえ、かな」

彼女が私の名前を呼ぶ。

「何？」

「怖がってないで、かなも見たら？」

「えー！ でも……」

私は彼女の問い掛けに首を振って見るのを拒否する。

「しょうがないなあー。じゃあ、手を握ってやるから、こっちに来いよ」

そう言っただけで彼は私の手を握り、トイレに近づくように促す。

「わ、分かった」

さすがにここまでされると私もいつまでもびびっているわけにもいかず、一步一步トイレに近づいて中を見る。

「どうだ？ 何か気になることあるか？」

「うんうん」

昼間も水を流すまで特に変わった様子はなく、今も見たと同じように思える。

「そうか。なら、水流してみるか」

「そうね」

「えっ！ そ、それはちょっと……」

「さすがにダメか」

「う、うん」

「まあ、でも流さないわけにはいかないわね」

「えっ！ ちょっと！ えりちゃん」

そうやって彼女は私が嫌がって止めるのを振り切って、水を流すレバーを回した。

16、流された水

私は水が流された瞬間顔を隠して、見ないようにしていた。耳はふさいでいなかったのだから、「ジャー、ジャー」と水が吸い込まれていく音だけが頭で響いている。

「うーん、普通だな」

「そうね。変わらないわね」

「ほ、本当？」

どうやら二人によると水の色は変わっていないらしく大丈夫なようだ。

「うん。ほら、かなも見てみなよ」

「えっ」

「ほら、終わっちゃうから。かな、早く！」

そう言っただけで彼女が無理矢理私の顔を覆っている腕をつかんでなかせた。

「あつ、ちょ、ちょっと」

すると目の前に少し弱くはなっているが、吸い込まれていく透明な水が写る。ここで今さら顔を隠してもしょうがないので3人で一緒に最後まで見つめていた。

「かなが見ても変化なしか」

「変わらなかったわね」

「そうだな。念のためもう1回」

「やめてよー!!」

さすがに二度も怖い思いをするなんて耐えられず、私は気持ちに任せて叫んだ。

「えっ！　なら、仕方ないか。じゃあ、タンクの中だな」

「そうね。開けてみましょう」

もう一度水が流されるのはなんとか阻止できたが、今度はタンクの中を二人は調べるようだ。当然に見ることなんてできるはずもなく、

再度私は顔を両手で覆った。

17、異変

「パツと見、特に何もなさそうね」

「そうだな。水は透明だし、何かが取り付けられているわけでもないか」

「これはかなの錯覚かもしれないわね」

「それはないと思うけどな」

「信じてるんだ、ともくん」

「まあな。信じないわけにいかないしな」

「それって彼女の言ったことだから」

「いや、そうじゃない」

「じゃあ、ちゃんとした理由があるってこと？」

「もちろん」

ここでタンクのフタが戻された音が聞こえ、私が顔から両手を離れたのと同時に彼が説明を始める。

「一番はその黒い水を目撃したのが昼間で、かつトイレの電気がちやんとついていたことだな。明るければそう簡単に見間違えるはずもないしな」

「なるほどね。でもかながこのトイレの怪談話を意識していたとしたら」

「それもそうか」

「それはないよ。だってどこのトイレがその話の場所か、私知らなかったもん。だから意識しないようにしてたし」

「あつ、そうか。確かこの話って前にどこであつたかは明らかじゃないんだよな」

「違うんじゃない？ 本当は誰かが知ってて恐怖を煽るためにそれを隠しているとか」

「いや、それはない」

そう言って彼女の意見を否定したのは、なんと廊下で見張っている

はずのかずき君だった。

18、恐怖のかくれんぼ

「おい、かずき！ 見張ってるんじゃないのか？」

「そんな場合じゃない！」

「どうしたの？」

「って、まさか」

「そのまさかだよ。足音が聞こえてきたんだ、廊下に影も見えた、警備の人が見回りに来たんだよ」

「まずいな。早くここから出ないと」

「そうね。とりあえず今日は切り……」

「それは無理だ」

「どういうことだ」

「挟み撃ちなんだよ、両方から」

「おいおい、マジかよ。参ったな」

「そんな、どうするの？」

「隠れるしかないわね」

「隠れるって、このトイレの中だけでか」

「仕方ないでしょ。ここしかないんだから」

「それはそうか」

「はあっ、かずきがもっと早く見つけてくれれば、ここから出られたのに」

「無茶言つなよ、真っ暗なんだから」

「まあ、いいわ。早く隠れましょう」

「そうだな」

「でもどこに隠れるのよ」

「そうね。私たちは身体が小さいから、洗面所の戸棚にしましょう。あそこは何も入ってないはずだから」

「うん」

「二人は和式トイレのドアの裏がいいんじゃない？」

「なるほど、死角になるな」

「確かに」

「あつ、足音が今……」

「もう、そこまで来てるな、急ぐぞ」

「うん」

トイレの中を調べている途中に迎えた最大のピンチ、4人は急いでそれぞれの場所に身を隠した。

19、死角

4人は電気を消して急いでそれぞれの場所に隠れた。通常なら学校のトイレにはドアはなく、漏れ出た電気の光で誰かが中にいるのが分かってしまう。しかし幸いなことにこの学校の女子トイレは防犯がしっかりしていて、入り口には窓のないドアがあり、光が漏れ出る可能性はかなり低かった。

「大丈夫かな、えりちゃん」

「しっ、静かに。声出したらダメよ」

「うん」

いよいよ足音が大きくなり二人の警備員がトイレに近づいてくる。

4人は声を出さずに息をひそめてじっとしている。

トイレのドアが開いて電気が付けられ、二人の警備員の声が聞こえてくる。

「どうだ、お前、ここまで異常はなかったか？」

「ありませんでした、先輩！」

「そうか」

「ここも異常はないみたいですね」

「そうみたいだが……、念のため調べるぞ」

「えっ、でも、ここ女子トイレですよ」

「何言ってるんだ。生徒と職員はもう帰ってる、俺たちが入っても問題ねえよ」

「はあ」

本当なら入り口から見渡しただけで出て行ってくれば、大助かりだったのだがどうやら中まで調べられるようだ。

「入るぞ！」

「はい」

二人は洗面所には目もくれず、奥に入って行き個室を一つ一つ開けて調べ始める。かなりまずい状況だが4人がいる場所は完全に死角

になる、相手がかくれんぼの鬼でもない限り見つかるはずはなかった。しばらくして二人が一通り調べ終わると……、

「おいっ、誰かいたか？」

「いません」

「なら、大丈夫だな。次、行くぞ！」

「はい」

こうして今日最大のピンチは上手く隠れたおかげで難なく過ぎ去っていった。

20、脱出

警備の人が出て行つて5分くらいは経つたかどうか、おそらくもう近くにはいないだろうと考えられる。

「もう大丈夫よね」

「たぶん……」

「出ましょ」

「うん」

私たちが先に戸棚から出て電気を付けて、他の二人に声をかける。

「もう大丈夫よ、出てきて」

すると二人がトイレの個室の裏から出てきた。

「いやー、危なかったな」

「だな。入ってきたときはもうダメかと思つたぜ」

「死角があつて助かつたわね」

「そうだな」

「さてと、どうする？　これから？」

「もう終わりでいいんじゃないか？　調べ終わつたんだろ、一通り」

「うん。じゃあ、今日はもう帰るか」

「はあつ、よかった」

「そうね」

帰ることになつてとりあえず一安心である。4人は電気を消して、トイレから出て声を出さず息をひそめて静かに1階まで降り校舎から出る。時計の針はすでに夜の9時を回っており、門は閉まつているため金網を昇つて道路に出た。

「なんとか無事に出られたわね」

「そうだな」

「行こうぜ！」

「おうっ」

「うん」

ここから4人の帰り道は途中までは同じ、一緒に話しながら帰っていく。そこで私はさつき途中で話が終わり、聞けなくて気になったことをかずきくんにきいてみた。

21、噂の始まり

4人並んで歩くと後ろから車が来たときに危ないので、私とともにくんは後ろを、彼女とかずき君は前を歩いている。

「ねえ、かずきくん」

私は前にいる彼の肩を叩いて呼び掛ける。

「なんだ？」

「1つ聞きたいことがあるんだけど……。」

「聞きたいこと？」

「うん。さつき、トイレにいたときにさ、かずき君が話に入ってきて「それはない」って言ったよね」

「ああ、どこのトイレか明らかじゃないって話か」

「そう、それ。なんですぐに否定できたの？」

「そのことか。実はな、あの噂、最初に知ったのは多分俺なんだ」

「ちよつと待つて！ それホント!？」

「マジか」

「う、うそ!？」

私も驚いたが、二人も声を上げて驚いた。

「あれ？ 私が教えたんじゃないかったけ」

「いや、実はそれより前に知っていたんだ。緑川先生から聞いてな」
緑川先生というのは彼の担任の先生で、普段は私たちに化学を教え
てくれている。年齢は見る限りでは35歳前後、赴任してもう10
年になることを聞いたことがある。

「そうだったんだ」

「毎年思ひ出らしいんだ、10年前に自殺したあの女子学生のこと
をな」

「そんな前からいたのか」

「でも私も先生から聞いたけど、去年の6月ぐらいに」

「俺はもう5月のときに聞いてたよ。まあ、えりから聞くまでは他

の奴には言わなかったけどな。で、そのときにそのトイレの場所までは分らないって言ってたよ」

「けどなんで思い出すんだ？」

「自分が初めてこの学校で受け持ったクラスの女の子だったんだよ。だから、なんで止めてあげられなかったのかって、今でも後悔しているらしんだ」

「なるほど。ってことは、いずれ先生にも話を聞かないといけないな」

「そうね」

「うん」

「それなら、さっそく明日聞きにいかないか、放課後に。俺、今回の話を聞いて確認しに行こうって思ってたから」

「そうだな、そうするか」

「うん」

こうして4人は明日の放課後、噂を流したその人、緑川先生に話を聞きに行くことになった。

22、先生の家で

噂ほど事実関係があやふやなものはない。多く人を介して伝わっていくうちに記憶の危うさで内容は変わっていくし、場合によってより魅力的な話になるように誇張されたり、改変されることもざらにある。となると一番確実なのは、その噂を最初に流した本人に聞いて確認するしかない。最もその本人でさえも記憶が定かであるか、どこにも保証はないのだが……。

トイレを調べた次の日、私たち4人は部活が終わって放課後、緑川先生の家に呼ばれていた。ただ話を聞きに行くだけで大げさだと思いかもしれないが、学校の校舎が8時以降施錠されて入ることができず、部活が終わるのが8時以降である以上、先生の家で話を聞くことになるのは必然だった。さらに話を聞き終わったあとは時間も遅くなり、夜道は危ないので親に事情を話して先生の家泊めてもらうことになっている。

先生の御主人と小学生の兄妹の二人と一緒に8人で楽しく食卓を囲み、4人それぞれお風呂を済ませて話を聞ける状況になったのは夜の11時過ぎ、他の3人が寝静まったあとだった。

「ごめんね、遅くなって」

「いえ、全然。今日は晩御飯まで、本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

まずかずき君がお礼を言つて、同時にみんなで頭を下げる。

「いいのよ、気にしないで。久しぶりに大勢でご飯を食べて先生も楽しかったから。それよりも……、本題に入る前に一つ聞いていい？」

「はい」

「さっきお風呂、男女で一緒に入ったでしょ？」

「ええ、まあ」

「は、はい」

先ほどお風呂に入るときお湯がもったいないから二人ずつ入ってと言われたのだが、考えもせず恋人同士で入ってしまった。

「先生もあなたたちが付き合っていることは知ってたけど、もう済ませてたのね、セックス」

「はい」

「まあ……」

「す、すみません」

他の3人が答えにくそうに返事する中、私はなぜか謝ってしまった。
「いいのよ、別に謝らなくて。恋人同士なら当たり前のことだから。でも、ちゃんと避妊してるのよね？」

「はい、大丈夫です」

「もちろん！」

「はい」

「なら、いいわ。それだけ確認しておきたかったから」

「じゃあ、先生。そろそろ例の話、聞かせてもらっていいですか？」

「ええ。始めるわね」

そう言っ先生のはころんでいた顔が少し引き締まり、話が始まった。

23、施錠される訳

「えっと、白井さんが見たのよね、黒い水を」

「はい」

「ここからは緑川先生の話になります」

10年前、自殺する2週間前に先生に“先生、私、見ちゃったんです、黒い水を”そう言ってきたのもあなたと同じ高校2年生だったわ。今でも先生後悔してる、なんで止められなかったんだろうって。だけど、先生がそのとき彼女から聞いた話は本当に恐ろしいものだった。

先生は当時、まだ赴任してきたばかりで、2年4組の担任を受けもったの。その黒い水を見た彼女は桃山美奈って名前だね、勉強はよくできて、どちらかといえば落ち着いた感じの子だったけど、欠席したことはなくて元気な子だったわ。で、その子が黒い水を見たと言って先生のところに来たのは、7月も半ば、すっかり暑くなっていたわね。

白井さんとは違って見たのは南校舎3階の女子トイレ、時間は部活が終わったあとの夜8時20分ごろ、忘れ物を取りに教室に戻ってついでに寄ったときに目撃したそうよ。

「えっ、じゃあ、ちよつと待ってください、先生。今8時以降校舎に入れなくなるのって……」

そう。きっかけはその彼女が黒い水をトイレで目撃して、その後酷いいじめを受けて最後には北校舎の屋上から飛び降りて亡くなった。そのことが原因だったの。

24、10年前と同じ

8時以降も練習している部活も私の高校にはざらにある。それなのに校舎はなぜか8時には施錠されて、誰も入ることはできなくなる。外にも一応トイレは設置されているため特に問題はないのだが、ずっと不思議に思っていたことの謎が今解けた。

「そうだったんだ、知らなかった」

「うん」

「それで、先生。彼女はトイレで何を見たんですか」

「引き続き先生の話になります」

黒い水よ、多分白井さんが見たような。彼女がトイレに入っただのはさっきも言ったように夜の8時20分ごろ、一番手前にある洋式の個室にね。用を足しているときは何も異常はなかった。そして立ち上がって水を流して、5秒ほど経ったくらい、ちゃんと流れたのを確認して外に出ようとしたとき、透明だった水が一瞬にして真っ黒に染まったの。彼女も黒い水の噂は聞いたことがあったみたいで、恐ろしくなって急いでそこから立ち去ろうとした。だけど手だけは洗って帰ろうと水道の蛇口の水をひねった、そうしたら今度は黒い水が出てきた。

「あつ、同じだ、私と」

じゃあ、10年前と同じことが起こったのね。結局彼女は叫び声を上げて一目散に逃げ帰ったそうよ。

25、病氣

「10年前の話はこんな感じね、何か質問はあるかしら？」

「はい、先生！」

ここで先生に質問を真つ先に投げかけたのはともくんだった。

「何？　ともくん？」

「先生は黒い水の怪談話、その話のもとになった出来事については知らないんですか？」

「ああ、そのことね。やつぱり知りたいよね？」

「はい」

「実は先生もみんな知ってる程度のことしか知らないのよ」

「そうなんですか？」

「ごめんね。そこまで遡るともう30年近くも前の話になっちゃうから」

「じゃあ、仕方ないですね」

「あつ、でも！　1つだけ話せることがあるかも。聞く？」

「はい、お願いします」

「えつと、じゃあ、みんな黒い水のもとの話がトイレで髪を黒く染めていた女子生徒の話ってことは知ってるのよね？」

「はい」

「だけど不思議に思わない？　染めるのはいいとしてなぜ黒かった？」

「確かに……、言われてみれば」

「もしかして日本人じゃなかったとか？」

そう言ったのはえりちゃん、これは十分に有り得そうな話である。

「そう思うでしょ。でも実は違うの。その子病氣だったらいいの、生まれつき毛の色素が薄い」

「えつ、それなら事情を話せば問題ないんじゃない？」

「学校側は許すわよ、もちろん。だけどいじめの標的にされたみた

いね」

「そつか。だからトイレで黒く髪を染めて……。あれ？ でも染めれば大丈夫なような……」

「そうだと私も思ってたんだけどね。けれどその先はもう私も知らないのよ」

「それじゃあ、他に知っている先生はいないんですか？」

「そうね。流石に30年も勤め続けている先生なんて……」

「一人いるんじゃないか？ 今はもう退職してるけど」

そう言って話の輪に突然入りこんだのは先生の御主人だった。

26、30年前

「あなた。まだ寝てなかったの？」

「ああ。ちよつと話している内容が気になつてな」

「その、さつき言つてたのは……」

「橙木先生だよ、一昨年退職した」

「橙木先生。確かにその人なら知ってるかもしれないわね。少なくとも30年はいたらしいから」

「じゃあ、その先生に聞きにいけば……。」

「多分話してくれるよ。家も近いしな、案内するよ、次行くときに」
「ありがとうございます」

「あの、もしかして先生の御主人つて……」

「おうつ、卒業生だよ。お前らの学校な」

「やつぱり」

「あれ？ でも先生の方が年上？」

「失礼ね。これでもまだ34よ。まあ、私の方が年上なのは事実だけど」

「実はな。俺が高校2年のときの担任でな。好きで告白したんだよ」

「えー！ じゃあ、先生と生徒で……」

「バカね、してないわよ。始めは断つたの。でもそれからもしつくされて、それでこつやつて一緒に暮らしてあげているのよ」

「それはちよつと……」

「うそうそ。本当はな、卒業式のときに言つたらオツケーされて、それから付き合いはじめて。こつやつて結婚もしたんだよ」

「すごい。いいな」

「はあつ、もう」

「なあ。今日しないか？ ちよつと俺、目が冴えちゃつて」

「えつ、何言つてのよ。この子たちの前で」

「いいじゃんか、明日は休日だし。そうだ！ お前らもしなよ、部

屋俺らと別々にするから。ちゃんとゴムもあるしな」

「しょうがないわね。ごめんね。この空気読まない、おバカさんのせいで。もう話、終わりで

大丈夫よね」

「はい！ ありがとうございます」

「行きましょう」

「ゴムはその電話の置いてある棚の下開けたら入ってるから。自由に使っていいぞ」

そう言つて二人は席を立ち、寝室に行つてしまった。僕ら4人もほぼ同時に席を立つと、敷かれていた布団を持ってそれぞれ別の部屋に行き、せっかくなのでゴムを1つもらつとそれぞれ二人愛の時間を過ごした。

27、二人目

私が黒い水を目撃してから早6日目の朝、いつもより少し遅い時間に登校すると、教室がざわざわしていて騒がしく妙な雰囲気だった。気になってともくんに話しかけてみる。

「ねえ、ともくん。おはよう」

「おはよう、かな」

「どうしたの？　なんか騒がしいけど」

「昨日見たらしいんだよ、2組の柴浜さんがかなが見たのと同じ黒い水を」

「えっ！？　それ、ホント？」

「ば、ばか。もっと小さな声で」

「ごめん」

「これはまずいことになってきたな、早く真相を突き止めないと」

「橙木先生からはまだ話聞けないの？」

「いや、赤田君に確認したら明日には聞けるそうだ」

「そう。でも、柴浜さん、どこで目撃したんだろうね」

「それもそうだな。昼休みにでも聞きに行くか」

「うん」

どうやら黒い水を目撃したのは私だけではなかったようだ。一人だけなら見間違いかもしれないし、単なる幻を見ているだけに過ぎないのかもしれない。しかし二人ともなれば幻ではなく、事実だろう。これは何かこの話には裏がある、そう私に予感させた。

28、もう一つのケース

午前中の授業が終わって昼ご飯を済ませると、私は彼と一緒に柴田さんのいる2組の教室に向かう。確か名前は柴田宏子さん、彼女はバレー部に所属していて、部活同士の交流で一度か二度、話したのが記憶にあった。

「かなはさ、どう思う?」

廊下を歩いている途中、彼は私にそう聞いてきた。

「どうって、何が?」

「君以外にも目撃者がいたってこと」

「えっ、分らないけど」

本当は思っていたことがあったけど、彼の率直な意見が知りたかった私はあえて自分の思っていたことを言わなかった。

「そうか。これは僕の勘なんだけど、この話、何か裏がある気がするんだ?」

「裏?」

「そう、裏だ。この話、もしかなが唯一の目撃者だったら、見たものは現実ではなく、全くの偽物、つまり幻を見ていた可能性も考えられる。しかし二人となると話は別だ。そんな同じ幻を別の時間に二人が見間違えるはずがない。となると考えられるケースは二つだ」

「二つ?」

「うん。一つは誰かが女子トイレに黒い水が出る仕掛けをして、それを偶然二人の女子生徒、つまりかなと柴浜さんが目撃したケース」

「もう1つ?」

そう私が聞き返すと、彼はとんでもないことを口にした。

29、あのこと……

「分からないか？ 柴浜さんが黒い水の仕掛けをした犯人で、目撃したと嘘をついているケースだよ」

「それはないよ、絶対。柴浜さん、悪そうな人じゃないもん」

「まあ、これはあくまで可能性の話だよ」

「ならいいけど……」

確かに彼の言ったことは可能性としては正しい、ただ前に柴浜さんと話したことがあった私はそんなことは有り得ないと確信していた。

2年2組の教室の前に着くと、彼女のことを知っている私が中に入って呼びに行く。彼女の席は教室の窓際、奥の端っこの方で机にノートを広げて勉強しているようだ。

「柴浜さん」

すぐそばに近寄った私は彼女の名前を呼ぶ。

「あつ、白井さん、よね？」

「うん。今ちよつといいかな？」

「もしかしてあのこと聞きに来たの？」

「まあ」

「いいけど、何かあるの？」

そう言われて私は彼女の耳元に口を近づけて、こっそりこう言った。

「実は私も見ちゃったんだ。だから今、調べてて」

「そう。分かった」

彼女は私の話を聞くと納得してくれて、机の上のノートを片付けて席を立ち、二人は教室を出て彼と廊下で3人一緒になる。

「僕、青山知輝。よろしくな」

「うん。私、柴浜宏子ね。よろしく」

「ここじゃ話にくいよな」

「うん」

「じゃあ、どうか人のいないところでも行こうか」

「ありがとう」

「うん」

こうして集まった3人は彼の案内で外に出て、誰もいない校舎の裏に向かった。

30、不思議なこと

彼女が壁を背にして立って、私たち二人はその正面に立って目を見つめる。最初に口を開いたのは彼ではなく、意外にも彼女のほうだった。

「私、話してもいいけど、その前に聞いておきたいことがあるの」「ん？」

「さっき白井さん、自分も見たって言ってたよね」

「うん」

「それホント？」

「ホントだよ。先週の木曜日の昼に、南校舎4階の女子トイレで」

「そっか。私が見たのは昨日の夜、場所は同じだったわ」

「同じか」

「それで、柴浜さんはどの個室に入ったの？ 私は手前から2番目だけ」

「あつ、それは違う。私は一番手前の」

「なるほど。続けて」

「トイレを済ませて水を流した。そしたら途中まで透明だった水がいきなり黒く染まって、底に溜まったの」

「蛇口の水は？」

「黒い水が出てきた」

「全く同じだな、かなが見たのと」

「うん」

「でも一つだけ不思議なことがあるのよね」

「何だ？」

すると彼女はここで驚くべきことを口にした。

31、仕組まれたこと

「実は私、この話、誰にもしてないんだよね」

「えっ!？」

「それ? どういうことだ?」

「私が昨日の夜、トイレで黒い水を目撃したことは事実。それは確かんだけど、まだ誰にも言ってなかったのよ。それなのに今朝学校に来たらクラスのみんなが知ってて」

「ホントか? それ」

「うん。だって、噂の怪談話にもあったでしょ。みんなに知れ渡って、それで彼女は酷いいじめにあって自殺に追い込まれたって。それを思ったら誰かに言えるはずないもん」

「なるほど。それもそうか」

「ねえ、どういうことだと思う?」

「それなら可能性は一つだ」

「えっ、分かるの? とくん」

「もちろん」

「じゃあ、教えて」

「誰かが仕組んだよ、その女子トイレで黒い水が出るように。それでみんなに柴浜さんが目撃したっていう噂を流したんだ」

「ちよつと待って! どうして私は……」

「かな、それは今から説明する。多分犯人の狙いは柴浜さんに黒い水を目撃させることだったんだ。だけど最初に仕掛けをした先週の木曜日、かなが見てしまった。そのとき犯人は相当焦ったはずだ、なにしろかなが目撃したことみんなに話してしまったら、誰も夜の校舎でトイレになんて行かなくなるだろうからね。そうなると計画が台無しになる。だけど幸いなことには僕は僕にしかそのこと話さなかった。それでみんなに広まっていなかったことを確認できた犯人は、もう一度同じ仕掛けをして、本来の対象である柴浜さんに黒

い水を目撃させたんだ」

「そっか」

彼女が告げた驚くべきことから導き出された彼の推理、黒い水の怪談話は今日最初の山場を迎えた。

32、心当たり

「ねえ、柴浜さんは何か心当たりってないの？」

「心当たりって、私が恨まれる？」

「うん」

「ないよ。だって私いじめとかしたことないし、彼氏とかもいたことないから」

「そうか……」

「あつ、でもそういえば関係ないとは思っけど、私のお母さん、この学校の出身だよ」

「へえー、そうなんだ」

「じゃあ、卒業したのっていつ？」

「えつとね……、今、……だから、30年近く前になるんじゃないかな」

「30年か。となると何か知っているかもしれないなあ」

「えつ、どういうこと？」

「あれ？ 知らないのか？ 黒い水の怪談話の噂」

「知ってるよ。さっき話したでしょ」

「いや、それじゃなくて。基になったのは30年前に起きた話なんだよ」

「そうだったの！ ねえ、詳しく聞かせて」

「ここで僕ら二人は彼女に基になった30年前の話を彼女に説明した。

「じゃあ、つまり私が今回見た黒い水もそこからきてるってこと？」

「そう」

「分かった。私、お母さんに聞いてみるよ、30年前のこと」

「ありがとな。今度聞いたことを教えてくれよ」

「うん。それじゃあ、私そろそろ行くね」

「ありがとう、柴浜さん」

「こちらこそ。私も聞いてもらえてちょっと安心した。またね」

「うん」

振り返って私たちに手を振り、彼女は元気に駆けて行った。

「よかったな。元気になったみたいで」

「うん。私たちも戻ろう」

「だな」

そう言って二人も彼女の後を追うように教室に戻って行った。

33、増えた謎

赤田君の話によると30年前に学校に勤務していたという橙木先生からは土曜日の昼に話を聞けるようだ。今日は金曜日、先週の木曜日に黒い水をトイレで目撃してから1週間以上になる。昨日すでもう一人の目撃者になった柴浜さんから話は聞いた。そのため特にもう一人の目撃者にならなかった私は、昼休みにご飯を食べ終わった後席に座ったまま、これまでに起きたことを含めて事件全体について考えてみた。

始まりは先週の木曜日に私が誤って黒い水を目撃してしまったこと、全ての謎がここにつながっている、そんな気がした。昨日の柴浜さんの話を聞く限り犯人の本当の狙いは彼女だったのだから。ただそれでも1つ不思議なのは彼女が目撃してから2日も経っているというに噂が広まっているだけで、いじめが起これないことだ。少し不謹慎なことを言えば私自身も彼女が本来のターゲットだと分かって怯える必要がなくなり、内心かなりほっとしていた。

しかしそれはあくまで昨日の彼女の話を書直に信じるのならばだ。そう思ってみると昨日のことでもう1つ疑問がある。これは話の内容とはほとんど関係ないのだが、彼女は私たちに話しただけで不安に思うことがなくなっていないにもかかわらず、最後に離れていくとき、笑顔を見せて予想以上に元気になっていたということだった。とすると決して彼女を疑っているわけではないが、話をそのまま信じて鵜呑みにするのも問題があるのかもしれない。

大体根本的なところを見つめ直してみると、まず犯人の意図がはっきりしない。彼女に恨みがあるならこんな回りくどいことなんてしないで、ストレートに何かをしたほうがいい気がする。それに彼女

が黒い水を目撃した話を犯人自身が広めるとなると、あとでいじめ
が起きたときに返って疑われる危険性があるのではないだろうか？

そう考えると誰が仕組んだというのは私たちの勝手な思い込みで、
実は本当に起きてしまった怪奇現象だと可能性も十分になる。結論
はどちらにせよまだ謎を解くには手がかりがそろっていないようだ。
そして明日の土曜日に橙木先生からどんな話が聞けるのか、その3
0年前に起きた出来事が全ての答えになっている、私にはそう思え
た。

34、30年前のこと1

6月11日の土曜日の昼の午後1時過ぎ、私たちは今日話を聞くことになっていて、橙木先生の家の前にいた。昨日の昼間ともくんが緑川先生から受け取った地図を頼りにここに辿り着いた4人、目の前にある家は少し古い感じはしたがごく普通の一軒家だった。

「ここか。意外と普通だな」

「そうだな」

「そうね」

「うん」

「鳴らしていいんだよな？ インターホン」

「待った。僕が鳴らすよ、事前に電話で話してるから」

「そうか。じゃあ、頼むよ」

彼はインターホンの前に移動すると、一呼吸置いて1回ボタンを押す。すると“ピンポン”と高い音が鳴り響き5秒後くらいに女性の声が聞こえてくる。

「はい、どちらさま？」

「先ほど電話させてもらいました青山です」

「どうぞ、門は開いてるから入って」

「はい、ありがとうございます」

彼がそう応対すると門を開けて中に入り、同時に玄関から奥さんと思われる人が顔を出した。

「いらつしゃーい。さあ、入って」

「おじゃまします」

「どうぞ、こちらへ」

みななどお辞儀して中に入り、靴を脱いで廊下を歩いてリビングから、ご主人が座っている奥の和室に案内される。

「おじゃまします、こんにちは！」

「こんにちは。さあ、そっちに楽にして座ってくれ」

「ありがとうございます」

「おい、母さん。お茶と何かお菓子を」

「はい」

「すみません」

「ありがとうございます」

4人全員座ると1分ほどですでに用意あつたのだろう、お茶とお菓子が運ばれてくる。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

橙木さん夫婦は二人も60代半ばくらいで、優しそうな雰囲気でも好感が持てる感じがした。

35、30年前のこと2

夫婦二人の印象が思っていたより優しそうだったので、重い空気ではなかったものの、流石に彼二人は緊張していて、話を切り出そうかどうか迷っているように見える。すると見かねたえりちゃんが口を開いた。

「あのう？ すみません。今日はお話を……」

「そうだったな。確か30年前にあった黒い水の怪談話についてか？」

「あつ、はい。それです」

こういうと周りに気圧されることなく積極的な彼女は本当に頼りになる。

「それじゃあ、始めるか。その前に、例の黒い水を見たというのは？」

「はい、私です」

私が返事をしてそう答える。

「君か。一つ言っておこう。まず、安心なさい、それは単なる誰かのいたずらだよ」

「えっ？」

「10年前に一人の女子生徒が自殺した件、緑川先生から聞いたな」

「はい」

「実はな、あの話には緑川先生も知らない続きがあるんだ」

「続きが……、ですか？」

「ああ。その女子生徒が自殺してから2ヵ月後、私のところに一人の女子生徒が来てな。言っただ、私、見ました」って」

「それって、まさか……」

「そのまさかだ。なんと目撃したと、夜の校舎の女子トイレで2、3人の生徒がこもって怪しい行動をしているのをな」

「じゃあ、犯人は……」

「それが未だに分かっていないんだ」

「でも怪しくないですか？ その女子生徒も」

「確かに。すぐに教えてくれれば犯人も分かったかもしれないが、2カ月後にはすっかり事は収まっていたからな」

「どうしてすぐに言ってくれなかったんだらう」

「いじめに巻き込まれるのが怖かったと言ってたよ。まあ、今となつてはどうしようもない話だな」

「そうですね」

最初に橙木先生から語られたこと、私はいたずらだという確信が強まったことに少し安心したけど、今回は本当に犯人が見つかるのか頭に重い不安がよぎった。

36、30年前のこと3

「一ついいですか？」

「なんだ？」

「どうして緑川先生に教えなかったんですか？」

えりちゃん聞いたことは尤もな疑問である。なぜ、当事者の一人である先生に教えなかったのだろうか。

「それは他の先生から止められたんだ。私は教えておいたほうがいいと思ったんだが」

「やっぱりそれって、緑川先生がショックを受けて目撃者に何かしかねないと……」

「そうなんだ」

「酷い。緑川先生、すごく優しくしていい先生なのに」

「ああ。私はもちろん先生を信頼していた。でも申し訳ないことだが、学校側の圧力には屈せざる得なかったよ。すまないな」

「いえ、先生は悪くないですよ」

「ありがとう」

「あの？ 先生それよりもそろそろ本題の……」

「あつ、そうだったな。では本題に入るとしよう。もうあれから30年になるのか、それは私が水原高校に赴任して3年目の時だった。彼女の名前は黒髪優希と言ってね、髪が薄い茶色の女の子だったよ」

「黒髪！？」

「えっ！？」

「うそっ！？」

「驚くのは分かる。まあ、ちょっと考えれば想像はつく。彼女がいじめに遭った理由、それはまさに名前と髪の色アンバランスさにあった。ただ彼女が高校1年の時は靴が隠されたり、時々悪口を言われたり、カバンに落書きがされていたりする程度だった。でも彼女が高校2年になると段々エスカレートしていき、机にカッター

ナイフの刃で“死ね”と傷つけられたり、訳もなく髪に因縁をつけて引っぱりまわしたり、しまいには殴る蹴るの暴行が陰でされるようになった」

「担任の先生は対応しなかったんですか？」

「しなかった。特に2年の時の担任は保身しか考えない最悪な男だな、私もいじめの事実を知ったのは2年生の11月頃、彼女が帰り道で集団暴行に遭っているのを見かけたときだったよ」

橙木先生が話し始めた30年前の出来事、それはちよつと意外なものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349v/>

恐怖の黒い水

2011年12月3日22時56分発行